

「樺太は、島である」 間宮海峡発見

間宮 林蔵

江戸時代後期、*樺太は

島か半島か、世界的にもまだ明らかにはされていませんでした。それを世界に先

駆けて明らかにし、世界地図に唯一名を残した日本人が間宮林蔵です。

林蔵は、常陸国（現在の茨城県）の貧しい農家に生まれました。幼い頃から数学の才能に優れていた林蔵は、竹ざおを使って木の高さや川の深さを測るなど、他の子とは少し違った遊びをしていました。

江戸時代といえ、身分制度の厳しい時代でした。農民の子が出世するなどあり得ないことでした。そのような中、林蔵が役人となるきっかけとなったのは、家の近くの堤防工事でした。林蔵はうまくいかない工事の様子を見て、役人に別の工事の方法を提案しました。すると、工事が成功したことから、林蔵は、その才能を認められ、江戸で測量

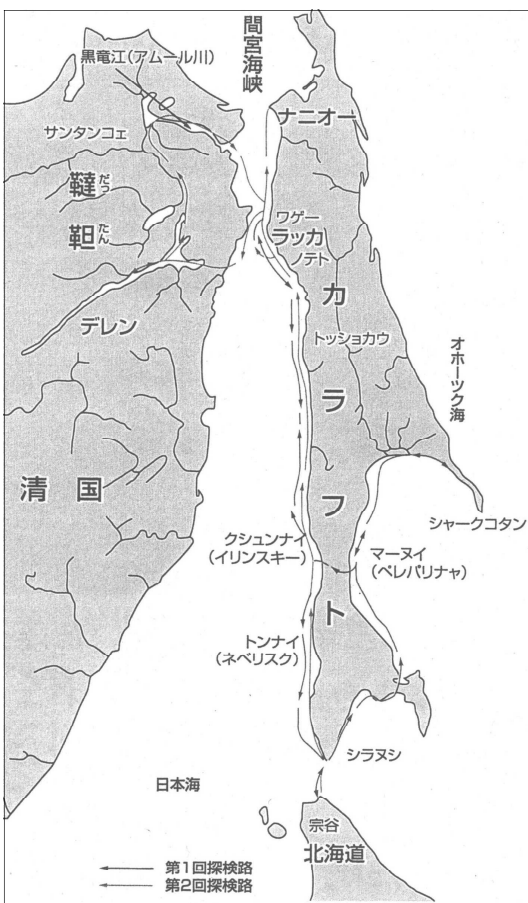


資料協力「茨城県つくばみらい市立間宮林蔵記念館」

等を学ぶことになりました。

一七〇〇年代末になると、ロシアがしきりに蝦夷地（現在の北海道）にやって来るようになり、幕府は北方の守りを固めるため、当時、様子がよく分からなかった樺太の調査を、松田伝十郎と林蔵に命じました。樺太は道なき道、うっそうとした森が続くと言われていました。よほど慣れた者でなければ達成できない困難な調査でしたが、それでも、林蔵は、「樺太の実態をはっきりさせたい。」と思いい、樺太に調査に行くことを決意しました。

一八〇八年四月に宗谷を出発した伝十郎と林蔵は樺太に到着し、北部のラツカまで調査を進めました。その先へ進むことができずに、同年六月に宗谷に戻りました。



【出典：小学校社会科副読本『わっかない』】

調査の目的を果たせなかった林蔵は、わずか二十日ほど後、再び単身で樺太に渡りました。やがて冬になり、極寒の地で林蔵は、ひどい凍傷に苦しみました。また、途中で食べ物がなくなるなどの苦しい環境の中、調査が続きましたが、決してあきらめませんでした。

林蔵はトンナイで冬を越し、春になると北へ向かいました。そして、「このまま北へ進んで広い海へ出たら、樺太は島のはずだ。」と考えノテトから舟に乗り、調査を続けました。樺太を右に見ながら舟を進め、北部のナニオーに着き、丘の上から果てしなく北に広がる大海原を見たのでした。

「樺太は、島である！」林蔵は、ついに樺太が島であることを突き止めたのでした。このとき林蔵が渡った海は、後に「間宮海峡」と名付けられました。

その後も、林蔵は、蝦夷地の調査を行い、十年以上もの間、様々な河川を含め蝦夷地内陸部を歩き回り、正確に測量して蝦夷地の地図を完成させました。

林蔵は、六十四歳で亡くなりました。樺太へ出発した宗谷岬付近には、林蔵の記念碑と立像が置かれています。

命をかけた探検の末に、樺太が島であることを発見し、長

い年月をかけて蝦夷地の地図を完成させた林蔵の功績を多くの人々が讃えています。

一七八〇	常陸国（現在の茨城県）で生まれる ※一七七五年生まれの説もある
一八〇〇	伊能忠敬と出会い、弟子になる（二十歳）
一八〇八	四月、第一回樺太探検に出発する 七月、第二回樺太探検に出発する（二十八歳）
一八〇九	間宮海峡を確認する（二十九歳）
一八一二	蝦夷地の測量を始める（三十二歳）
一八二二	蝦夷地の測量を終えて江戸に戻る（四十二歳）
一八四四	江戸（現在の東京）で死去する（六十四歳）

*樺太：宗谷海峡の北に位置する長大な島

*測量：機械を使って高さや広さ、距離を測ること

*凍傷：厳しい寒さのために、皮膚などが傷つくこと